



だった。シャンソン歌手たちは最早「パリの下町訛り」parigotsで歌わなくなり、ヌード・ダンサーもパンを得るためだけに裸になったのである。第3帝国の士官たちは、タバランで夜食を取った。

自由地帯から来るためには「身分証明書」Ausweisが必要だった。広場や通りに人影はない。「燈火管制」black outは完全だった。侵略者の光を除き、一条の光もなかった！しかし抵抗は組織化されていく。

1918年のドイツ敗北の記念日になる、1940年11月11日の朝早くから、労組の代表らが、シャン・ゼリゼのクレマンソーの像の前に三色の花輪を供えた。日中にはデモ行進があり、夕方は学生たちがエトワール広場に集合した。これらの運動は花輪や花束を除去した占領軍により厳しく弾圧された。

食糧問題が一番だった。夜明け前から人々は起き出して、パン屋や食糧品店の前に行列をつくった。バター、卵、チーズが豊富になったのは、痩せこけた哀れな自転車こぎの運転手たちが二輪タクシーで運んでいたからである。人々は集まる。友情が厚くなる。誰ももう流行を追わない。女性たちは板底の靴でアサファルト道路を鳴らして歩き、花柄の大きな服を着た。贅沢は怪しまれる。自動車はガソリン不足で動かない。秘密出版の雑誌で、アラゴンやエリュアール<sup>4)</sup>の詩が読まれる。

「パリは寒く、パリは餓えている...

パリはメトロの中で空気もなく立ったまま眠る」

しかし、エリュアールは歌う。

「パリは自分を解放するだろう

パリは星のようにきらめかす

ぼくらの生存している希望を

君は疲れや汚辱から自分を解放するだろう...」

人々は慎重にロンドン放送の自由フランスの声を聴く。地方紙は影響力を持たない。「フランス語のドイツ新聞」と人々は地方紙を呼んだ。ド・ゴールはますます解放者としてみられるようになる。

ドイツ兵はパリの到る所にいた。彼はチュイルリ公園の眺望の前に姿を見せ、街角や、メトロや郊外線の中に現れる。彼は「コレクト」である。それは「フリッツ」であり、「ヴェール・ド・グリ」であり、「フリドリン」であって（1914年の「ボッシュ」<sup>5)</sup>でない）。開戦直後のすらりとした青年たちにかわり、今やって来たのは首筋に脂肪がたっぷりつい

た太鼓腹のちびで、ハンスの類だった。パリ市民たちは、彼らを黙殺して通り過ぎた。ドイツ兵たちは自分たちが見下されているように感じ始めた。「我々は野蛮人ですか？　そうでしょうか！」ヒトラーは自分が作成したブラック・リストにのった本と同じく、マティス、ブラック、スーティン、ルオーら、真に価値のあるものすべて、生きているものすべてを墮落した芸術として追放する。彼は釣「竿」gaulles<sup>6)</sup>を肩に担いで騒動を起した高校生たちを逮捕するよう警官に厳命する。(何人かは英雄的行為に走った勇敢さのため銃殺されたのである。)

おぞましいナチの布告により、パリのユダヤ人たちは調査された。2万5千人のユダヤ人がパリの冬期競輪場に閉じ込められる。他のユダヤ人は墮落の印として黄色の星をつけなければならなかった。女性や子供たちの恥づべき逮捕が実行される。ユダヤ人たちや抵抗派の人たちは家畜輸送車につめこまれ、死の収容所へ連行された。首都は物悲しくうらぶれてしまう。

## 解放

しかし、徐々に、情況は転回する。アメリカが不屈のリズムで戦闘機や爆撃機の数を増大させている事は、誰もが知っていた。反乱の勃発は、ノルマンディー海岸へ米英連合軍の第一回の上陸<sup>7)</sup>が発表された時に起った。

1944年8月15日火曜日、フォン・コルティツ將軍<sup>8)</sup>は、連続する空爆と頻発するサボタージュにより、首都が脅かされている、と宣言する。パリは到る所で、ガスもとまり、停電し、食糧もなくなってきた。メトロは運転中止となる。鉄道員は仕事をやめる。警官はストをする。ノートル・ダム・デ・ヴィクトワール教会<sup>9)</sup>では、群衆が、ルイ13世の誓(フランスを聖母マリアに奉献すること)の記念式典参列のため、教会の身廊に入りきれず溢れ出す。ブリュックベルジェル神父の礼拝式で、人々はパリの守護聖女の聖女ジュヌヴィエーヴと聖女ジャンヌ・ダルクに加護を祈った。雑誌も無し。新聞も無い。ドイツ兵は小部隊に分れてパリから撤退し始めた。

「大パリ」司令官に任命されたフォン・コルティツは、首都の工場と橋を破壊せよとの命令を受けていた。しかし、そうしたらすべてがドイツのために失われることを知っていたので、彼はこの都市を救うためあらゆる事をしようと既に決心していたのである。スエーデン総領事ノルドラング氏は、ドイツ兵と拘留されているフランス人の政治犯の交換を提

案し、実現に成功していた。

パリは待っていた。ある人たちは、時期尚早の蜂起の危険も考えず反乱に突入しようとして、数度の攻撃を行った。警察は彼らを抑制しようとする。しかし、既に、ドイツ軍は混乱の中に撤退していた。ストライキは倍増する。「パンを！」と、市役所前に集まった市役所の職員たちが叫んだ。19日、ドイツ軍とフランス国内軍 F.F.I.<sup>10)</sup> は戦闘をしていた。防衛の中心のサン・ルー教会<sup>11)</sup> へ、三色旗の腕章をつけた青年たちを満載した車が向っていた。三色旗が到る所に掲げられた。発砲がある。熱くて息が詰りそうだった。50名の歩兵を乗せた3台のトラックがパリ警視庁に発砲した。抵抗派の警官たちが、いまだに敵に従順な警官たちを説得した。激戦がサン・ミシェル大通りで続行する。19日土曜日、仕事をしていた各区役所もほとんどの所で自由委員会の前から引き下がる。しばしばフランス国内軍とフランス義勇軍 F.T.P.<sup>12)</sup> の間で、口論があったのは、後者があまりにも無謀に攻撃しようとしていたからである。20日、占領軍に売却されていた新聞の印刷所、リヴォリ街の「*Je suis partout*」<sup>13)</sup> とピラミッド街<sup>14)</sup> の「*la Gerbe*」のような報道機関が占領された。

人々はまだドイツ軍の集団的反撃を恐れていた。22日、停戦があった。コルティツは重砲を使用しなかった。(もし彼が警視庁を砲撃していたら、ノートル・ダムやサント・シャペルも破壊される危険があった)。彼の飛行機は彼をたたえる布告を散布する。それには次のように書かれていた。「スターリンなら四方からこの都市に砲火を浴びせたであろう。我らの愛するパリ、西欧文明の中心であるパリのため、この運命から守られるべきである。」

しかし、間もなく、戦闘は再開される。フランス国内軍とフランス義勇軍は活動をはじめ。戦闘は、東駅<sup>15)</sup>、クリニャンクール門<sup>16)</sup>、ヴァンドーム広場からサン・タンドレザール広場、ゴブラン街<sup>18)</sup> へと拡大して行った。「なんたる事か！ と抵抗派は思った。何年も前から自由解放を準備してきたのは、こんな戦いを避けるためではなかったのか！」21日、休戦が破られる。造幣局<sup>19)</sup> とサン・セヴラン教会<sup>20)</sup> の間にバリケードが築かれる。ドイツ軍がそれらを攻撃する。パロディ<sup>21)</sup>、ビドーラ<sup>22)</sup>、レジスタンス国民会議 C.N.R. のメンバーが、ダンフェール・ロシュロー<sup>23)</sup> の駅の前の家に集合する。

かくして、全面的な反乱が決定された。8月22日火曜日から24日まで、市街戦、人狩り、ドイツ軍の車輛目めがけて投げつけられたモロトフ・カクテル<sup>24)</sup> となった。フランス国内軍とフランス義勇軍はできる所はどこでも攻撃した。彼らは犠牲者をラファイエツ

ト街<sup>25)</sup>に残した。バリケードを作るためトラックが横倒しにされた。

突然パリのあらゆる教会で、鐘が大音響で打ち鳴らされる。人々は言い合った。やっと来た！ 解放者が城門に着いた！

歓喜の爆発の中、8月25日金曜日、オルレアン門から英米連合軍と共に、ノルマンディー海岸に上陸したフランス軍唯一の部隊ルクレルク<sup>26)</sup>師団が入城したのである。第2機甲師団は、師団長の切望とド・ゴール將軍の承認を得て、パリに進撃する命令を受けていた。それは感激であり、到る所でまきおこるざわめき、旗を飾るために開かれる窓、興奮の熱気、熱狂であり、人々は数を増して喜びに酔ったのである。女性たちは歓喜していた。自分の車の上に立っていたルクレルクはたちまち口紅で覆われてしまった。彼は先ず警視庁に赴き、そこで彼を待っていたパロディ、ロベール・ラコスト<sup>27)</sup>らに迎えられた。ヴィクトール・ユゴー大通り<sup>28)</sup>から到着したラングラード部隊はコンコルド広場に向け行進した。14時35分、解放者たちはオテル・ムーリス<sup>29)</sup>に入り、入口のヒトラーの肖像を取りはずさせた。「將軍はどこですか？」とフランス軍の士官が尋ねた。軍服をびしと着こなし、モノクルをつけ、生き生きとした顔をした、可成り頑丈な男の前に来て、士官は自己紹介をして質問した。「將軍閣下、戦闘を停止なさいますか？」フォン・コルティツは受諾したが、軍人として扱ってくれるよう要求した。フランス軍中尉は將軍を同行し、車を探しに行った(赤十字の看護師が人々の攻撃から彼を守るためボディエー・ガードの役をしなければならなかった)。警視庁で、ルクレルクはフォン・コルティツを椅子に座らせた。一瞬後、ドイツ軍政府は、ルクレルクに降伏文書を提出した。連合軍とパリ市民により首都の解放に献げられた文書は、同じ日にルクレルクに公式に再度手渡されたが、モンパルナス駅にあるフランス軍総司令部に、17時に行って作成された付属文書が添付されている(二人の將軍は装甲車で総司令部に行ったのだが、弾丸の中をくぐり抜けて行ったのである)。

その翌日は、歴史的行進だった。15時、パリ市民は行列を待っていた。エトワール広場は戦車で封鎖され、シャン・ゼリゼ方面のみが自由に行けた。「ド・ゴール萬歳！」ケーニック<sup>30)</sup>、ルクレルク、ジュアン<sup>31)</sup>、ダルジャンリュエ<sup>32)</sup>、首脳たちが、フランスの名誉と独立を常に維持し続けた人物を取り囲んだ。屋上のどこか判らぬ場所から発砲してくる妥協をしらぬ人殺しや狂人や不信者にも不拘、シャルル・ド・ゴールは、ビドー、パロディ、ル・トロケ、ラコストら、この土地で自分に協力してくれたすべての人に囲まれ、車に乗らず歩いて行進した。その後を自動車、ジープ、戦車、兵士や娘たちを満載したあらゆる

車輛が続いたのである。占領されていたコンコルド広場は人で溢れた。人々はゆっくりとノートル・ダムに進んだ。

ド・ゴールは、群衆に押され、拳をふりあげて人目をひいた。彼が教会に入るや否や、銃声が出た。人々は腹這いになるか、柱にしがみついた。将軍は、平然と歩を進めた。人々は「聖母賛歌」*la Magnificat*<sup>33)</sup>を歌いだす。発砲は止む。陰謀？ 狂乱？ どうでもよい事だ！ 終わったのだ。しかしパリは11,000名が銃殺され、そのうちの4,500名がモン・ヴァレリアン<sup>34)</sup>で処刑されたのである。

### 未来のパリ

かくしてド・ゴール将軍が指揮をとる臨時政府が設置され、1947年1月1日に第5共和政が発足した。彼の辞職後、次々と内閣が代った。

戦争が長期化したアルジェリアで、植民者たちが決起する。上下両院の混乱の中、コティ大統領<sup>35)</sup>に招聘されたシャルル・ド・ゴールは人民投票により権力を掌握し、1958年5月13日、第5共和国憲法を承認させる。

造形美術においては、より多くのグループ、より多くの流派が生れた！ 画家や彫刻家たちは、もはやカフェにはいかなくなる。サン・ジェルマン・デ・プレのレ・ドゥー・マゴヤル・フロール —— そこは戦後サルトルが本部を置き、実存主義を発表した —— は今や芸術の歴史より風俗の歴史に興味をもつ人たちに占拠されている。しかしながら、あらゆる国籍の芸術家たちから構成されていたエコール・ド・パリは常に生气に溢れており、今でも画家や彫刻家の先頭に立っている。

それ以来、映画、ラジオ、テレビは首府の生活を田舎の最も小さい町の生活と同じく普及させている。国際的にならねばならない時に、人々はヨーロッパ的でありたいと願っているようだ。カルネ<sup>36)</sup>の「天上棧敷の人々」*les Enfants du paradis*からレネ<sup>37)</sup>の「二十四時間の情事」*Hiroshima mon amour*まで、良い映画はフランスのプロダクションの活動で生れたのである。

パリは現在、庭もなくあまりにも密集した家や通りを持つ都会の中に窒息している。その過去にふさわしい未来を予知する能力を持っている人々の言う事を聞かないため、パリは毎日少しずつその価値と威信を喪失している。その結果、パリの連続性への配慮を託された人たちは、最も過激な解決法、いかなる代償を払っても避けたい解決法たる妥協を考

慮するに至るのである。

「破壊も再構築もすべきでない」と極めて正当に言ったのはベルナール・ゼルフェスである。彼は民家及び国立宮殿の建築主任で、パリの未来について健全かつ大胆な見解を有する少数派の一人である。

パリはオスマン以来ほとんど変わっていない。建築学的にも社会的にも普通はたいした価値のない建物がパリには増てきた。但し次のものは別である。シャン・ゼリゼ劇場、大学都市、新トロカデロのテラス、ユネスコとデファンスの十字路の万博ホール of 建物の。この建物はサン・ペール街<sup>38)</sup>の医学部の新しい建物のようなおそろしく不格好な建物と見事なコントラストをなしている。パリはもはや都市計画のリーダーを持っていないのだろうか？　ただ一人アンドレ・マルロー<sup>39)</sup>のみが、首都の主要な記念建造物を洗浄して最初の白さを与えた事により、よく構想された「パリ風」parisianismeの評価を受ける権利がある。

以上の事は、我々に再び希望をとり戻すように励ましてくれる。何故ならパリが脅かされている苦悩を前にしてその唯一の「変貌」をもって、昔のこの都市を現在の無力な都市にしまおうとしている人々に対し、あらゆる所から警告の叫びを投げつける事が必要なのである。

パリは、まさしく、他のものを見てきた！　モーターの唸りの下から、パリの悲鳴、笑声、叫びの長い連祷が私には聞こえてくるような気がする。墓の下から、骨の山が、先史時代、現在の大通りを横断していた動物たちの骨から、グルネル街<sup>40)</sup>の人間の頭蓋骨やパリジイ族の貨幣<sup>41)</sup>までが出現してくるのが見えるようである。この都会の偉大なる姿が、セーヌ河畔の風　——　揺れるが決して沈まぬ小舟を常に進ませている風　——　の中に、何世代もの人たちが壁を一つ一つ築いて建設した記念建造物の中に浮んでくるように、私には思える。聖女ジュヌヴィエヴがいらした。パリを救うために、新しい奇蹟がどうして生じないのだろうか。かくて、新しき都市、垂直の都市は、光栄あるシテの周囲にパリの活力を追究して行くであろう。かかる未来を、考える時、偉大なる時が今である。

— 完 —

— 2009.7.9 —

バ リ

— 誕生から現代まで —

(訳 注 XXXIII)

1) drôle de guerre : 1939年3月15日、ドイツはチェコに侵入、前年成立したミュンヘン協定の平和は崩壊、それまで融和策をとってきたフランス、イギリスは対独強硬策に方針を転換、有事の際は、ポーランド、ルーマニア、ギリシャを支援する事を確認した。8月23日、独ソ不可侵条約が成立し、二正面作戦の危機がなくなったドイツは、9月1日から開始した電撃作戦でポーランドを1か月で征服してしまう。これに対し9月3日、イギリスとフランスはドイツに宣戦を布告、第2次大戦が始まる。

フランスは第1次大戦の攻勢戦術の大失敗を教訓とし、防衛戦略を基本としていた。マジノ線がその具体的姿である。従って開戦当初も積極的攻勢にでる事なく、ドイツ軍がポーランドを征服するのを傍観していた。ドイツ軍もポーランドの占領政策が完了するまで、西部戦線には積極的な攻撃をしなかったため、1940年5月10日、ドイツ軍がベルギー、オランダ、ルクセンブルグに対し電撃作戦を開始するまでの約8か月間、戦場には奇妙で平穏な時間だけが流れた。この期間を「奇妙な戦争」と呼んでいる。

2) gouvernement de Vichy : ヴィシーは中部ブルボネ地方のアリエール県の都市で鉱泉の湯治場として有名。人口は約34,000人。ペタン将軍を首班とする政府は、1940年7月10日から1944年6月22日まで存続した。議会の多数決で全権を承認されたペタンは新憲法を制定（しかしこの憲法は実施されなかった）、ラヴァルを副大統領とし自分の後継者に指名した（1940.7.23.）。政府のモットー「労働、家族、祖国」は反動的な国粋主義的色彩の強い保守派のものであった。多大の犠牲がでるかもしれない戦争を停止した休戦の実現は、最初は国民の多数の支持を得たが、戦況の進展と共に対独協力の姿勢が強くなり、対独協力は祖国への逆行行為とみなされるようになった。結局ヒトラーの敗北と共に、ナチの傀儡政府と化していたヴィシー政府は、1944年夏の8月22日に崩壊した。

3) Charles André Joseph Marie De Gaulle (1890-1970) : ベルギーと県境を接する北仏ノール県の県庁所在地リールの出身。教養あるカトリック信仰の一家に生れ、ベルグソン、ペギーなどを愛読、士官学校卒業後、ペタン大佐の第3連隊に勤務、第1次大戦ではドーモンの戦いで捕虜になり（1916）、何度も脱走を計ったので、インゴルシュタット要塞に移送監禁された。釈放後は母校サン・シールで軍事史を教え、ペタン将軍の幕僚



から、同将軍の内閣の最高国防会議副議長になる(1925)。この頃から軍事関係の著書で知られ、特に *Vers l'armée de métier* (1934) では機械化師団の必要性を力説。将来の戦闘では機動力のある機械師団が決定的力を発揮すると主張した。しかしド・ゴールのこの主張は軍上層部に無視された。第2次大戦では第4装甲師団を率いてドイツ軍の追撃を一次的にも阻止した。フランス降伏後はロンドンに亡命、徹底抗戦を呼びかけ、自由フランス軍司令官としてアフリカに転戦、ドイツ降伏後はヴィシー政府に代る臨時政府首班となった(1944-46)。その後政界を引退したが、アルジェリア独立をめぐるフランス国内の対立と混乱の收拾のため要請されて復帰、フランス国民連合を率いて選挙で大勝(1947)、首相となった。彼は憲法改正により国家元首の権限の強化を要求し、次第に独裁的傾向を強めた。こうして第4共和政が退場し、第5共和政が誕生する。彼の目的は対外的には米ソと対等の偉大なるフランスの自立であり、国内的には高度経済成長による繁栄であった。北大西洋条約機構からの離脱、ベトナム戦争のアメリカ批判、ソ連、ドイツとの友好関係の樹立などの外交政策は、フランスの国際的威信を回復させた。また有能なテクノクラートの活動により科学技術の進展による原子力産業、航空機製造などの発展はフランスに大きな経済発展をもたらした。しかし偉大なるカリスマを必要としなくなりつつあったフランスは、この老政治家の引退を期待するようになる。ド・ゴールはその事を悟り、オート・マルヌ県の小村コロンベイ・レ・ドゥ・ゼクリーズに引退し、そこで歿した(1970.11.9.)。享年80歳。

4) Paul Eluard, 本名 Eugène Grindel (1895-1952) : パリ北方のサン・ドニ市生れの詩人。中学生の時に結核になり、スイスのダヴォスにある療養所に入ったが、この期間に文学の洗礼を受けたらしい。ランボー、ロートレアモン、アポリネールの作品の他、ホイットマンの『草の葉』も愛読した。第1次大戦で毒ガスにより気管支をやられ、これが彼の一生の宿痾となった。第2次大戦にも動員されたが(1918)、翌年除隊し、ブルトンやアラゴンの「文学」に参加、ツアラがパリに移住してきた時には、ダダの運動にも参加し、その後シュルレアリスム運動にも加わり、機関紙「シュルレアリスム革命」の創刊に協力し(1924.4.12.)、以後39年までブルトンと共に活動した。第2次大戦中の占領下のフランスで抵抗運動に参加、共産党に入党(1942)、新鮮で自由な形式で、単純率直な言語を使い、ナチの暴虐を指弾し、祖国の自由解放を熱唱した。また飾り気のない純粋な人間性の発露たる愛を抒情的に歌って、圧政に苦しむ一般庶民を勇気づけた。代表作は『苦悩の首都』*Capital de la douleur* (1926)、『政治詩篇』*Poèmes politiques* (1948)

など。

5) これらはいずれもドイツ兵の蔑称であり、vert-de-gris は、1940年から44年の占領中のドイツ兵の軍服の色「緑青」を指している。

6) gaulles「竿」がド・ゴールを連想させたため。

7) 米英軍を主力にした連合軍は、1944年6月6日に開始された。オーバロード作戦と命名されたこの史上最大の作戦はアメリカ軍のアイゼンハワー将軍指揮の下、2,000機の飛行機の援護を受け、最終的に35万人が参加した。ドイツ軍はドーバー海峡のパ・ド・カレーを上陸地点と予想していた。このためノルマンディー沿岸の防備は比較手薄だったため、連合軍は6日間の間に10軒から20軒の橋頭堡を確立できたのである。これは第3帝国の崩壊を予告するものであり、連合軍上陸の報は、フランス各地の抵抗派の決起を促した。

8) Dietrich von Choltitz (1894-1966)：ドイツの将軍、スターリングラード (1941)、イタリア (1943)、ノルマンディー (1944) と転戦、1944年8月9日にパリ軍事総督に任命された。彼はヒトラーからパリのすべて記念建造物を破壊せよとの厳命を受けていたが、これを拒否し、パリを救った。8月25日にルクレルク将軍に降伏した。ドイツ軍の将軍たちの収容所では、命令違反者への反感からか、一人孤立している事が多かったと伝えられる。バーデン・バーデンで死去。享年72歳。

9) église Notre-Dame-des-Victoires：第2区のプティ・パール広場にある。ルイ13世が、1629年12月9日に礎石を置いて建設が開始されたが、工事はなかなか進まず、資金不足で1632年に中断、1642年に再開、また中断をくりかえし、1740年11月3日やっと完成した。この教会はルイ13世の勝利、特にラ・ロッシュェル占領を祝賀して建立されたものである。この教会の大祭壇の下に広い地下納骨堂があり、有名な音楽家のジャン・バティスト・リュリが妻子と共に眠っている。大革命時代に略奪されたが修復された。パリ・コミューヌの時に再び略奪にあったのは、貴重品を司祭が逃亡する前に地下に隠したという噂が立ったためである。1927年、ピオ10世が小さいバジリカを建立している。

10) Forces Française de l'Intérieur (F.F.I.)：1944年2月、フランス国内で抵抗運動をしていた諸部隊が、国民解放委員会の努力により合同して出来た部隊の名称。不十分な武力しか持たなかったが、F.F.I.は連合軍のノルマンディー上陸作戦を援護、ドイツ軍の早期撤退の実現に圧力をかけた。特にブルターニュ地方、フランス南西部、中部フランスでの活躍が大きかった。その後F.F.I.の構成員約14万人はド・ラトル・ド・タッシニ

将軍の第1軍団に編入された。

11) église Saint-Leu-Saint-Gilles : 第1区と第2区にまたがるサン・ドニ街(長さ1,334米, 幅13米から30米)の92番地にある。この教会はシテ島にあったサン・バルテルミー教会の分教会として、1235年に建立された。1320年に改築, 1611年に増築, 以後も増改築をくりかえし, 1780年に完成した。大革命時代に民間に売却されたが(1793), 1804年に再び教会となり, 1849年に正面入口と北側の鐘楼が修復された。その後もセバストポール大通りの開通やシーニュ街などの延長工事のため, 教会の建物のみが残される結果となった。

12) Francs-Tireurs et Partisans Français (F.T.P.) : ドイツ占領下(1940-44)のフランスで活動した抵抗派の武装団体。スペイン内乱の時の国際旅団の隊長たちによって組織され, 共産主義に絶対服従していた。1944年2月にF.F.I.と合併するまではブレナン, 次にシャルル・ティヨンが指揮していた。

13) *Je suis partout* : 1930年に出版業者アルテーム・ファヤールにより創刊された週刊誌。ピエール・ガクソットが編集にあたり, 当初は外国の政治問題や研究にあたった。1936年以降, フランスの政治により多く頁をあてるようになり, 人民戦線反対の猛烈なキャンペーンを展開, スペインのフランコ総統の運動を熱心に支持した。アクション・フランセーズから参加した若きインテリたち, ロベール・ブラジラック, リュシアン・ラバトラがファシズム支持にこの週刊紙の軌道を修正する。ガクソットは, 1936年には既に編集長を辞任していた。1940年6月に休刊, 翌41年2月7日に復刊した*Je suis partout*はブラジラックが編集長になったが, 彼も1943年7月に辞任する。この週刊紙は対独協力の最も活動的な機関紙の一つだった。1944年8月に廃刊。ブラジラックは解放後に逮捕され, 死刑の判決を受け, 処刑された(1945.2.6.)。享年36歳。

14) rue des Pyramides : 第1区にあり, ピラミッド広場とオペラ座大通りを結ぶ, 長さ277米, 幅12米から20米の通り。この通りは, 1802年にピラミッド広場とサン・トノレ街を結んで新設されたが, 後に順々と延長され, 1816年に現在の通りになった。しかしその当時, 民家は一軒も建っていなかった。この名の由来は, ナポレオンがエジプト遠征の時, 1798年7月21日, ギザのピラミッドを前にして突撃してくるマムルーク騎兵を撃破して勝利をおさめた有名なピラミッドの戦いを記念したものである。

15) La gare de l'Est : 第16区ストラスブル街(長さ223米, 最狭幅20米)にある。最初はオーベルヴィリエ街のヴェルチユス柵門の近くにあったが, 1847年11月から

1850年12月までの工事で完成しここに移転してきた。長さ160米のホールに5本の線路が建設され、費用は1,800万フランだった。

パリとストラスブルグを結ぶ列車の発着場だったので、ストラスブール駅と呼ばれていた。1852年7月8日のパリ・ストラスブール線完成祝賀会にはルイ・ナポレオン大統領や閣僚、上下院の議員たちが多数参列し、一番列車に乗車した。やがて手狭になったため、1895年から1899年にかけて3倍以上に増築され、1924年から1931年にかけて再び増築、1925年当時の25本の線路が30本に増設された。パリで最も広い停車場である。

16) porte de Clignancour：パリ北部の城門で、現在は同名のメトロの駅がある。クリニャンクール街（長さ1,325米、幅12米から32米）は昔のクリニャンクール村の村道だった。時代と共に延長され、1868年に完成した。

17) place Saint-André-des-Arts：第6区にあり、大きさは48米幅と長さ14米の広場で、サン・ミシェル広場に面し、サン・セヴラン、オートフーユ、ダントン、シュジュ、サン・タンドレ・デ・ザールの各通りが合する交通の要所である。この広場にある同名の教会の歴史は古く、1210年から12年にかけて建立され、後に何度も改築され現在に至っている。1694年、ヴォルテールがこの教会で洗礼を受けている。サン・タンドレ・デ・ザール街（長さ320米、幅6米から15米）は、左岸では、サン・ジャック街などとならんで、昔のパリの最も重要な通りであり、64番地は昔の城門の一つ porte de Buciがあった。

18) rue des Gobelins：第13区にあり、ゴブラン大通りとベルビエ・デュ・メッツ街を結ぶ、長さ86米、幅8.5米の通り。1552年頃までは、この近くを流れていた川の名をとってビエーヴル街と呼ばれていたが、ゴブラン織りの工場が建設されてから、17世紀半ば頃からは、この名になった。17番地に、サン・ルイの未亡人マルグリット・ド・プロヴァンスが建築させた「ブランシュ王妃の館」hôtel de la reine Blancheがあり、彼女はそこで歿した。1295年の事で74歳と伝えられている。ブランシュ王妃については諸説があり、カスティリア王に嫁いで未亡人になったマルグリット・ド・プロヴァンスの娘 Blanche de France、1350年に夫フィリップ6世を失って未亡人になった Blanche d'Evreux、さらにサン・ルイの母 Blanche de Castille とする説まであった。この邸で起った最も有名な事件は、1393年1月28日火曜日、仮装舞踏会で、仮装の衣裳に火がついて、シャルル6世が焼死しはぐった椿事である。辛じて助かったが、この事件のショックで、シャルル6世の狂気が決定的になったと伝えられている。1404年にこの館は取り壊された。1443年に清流ビエーヴル川の川水を利用せんとして、ジャン・ゴブランが織物工場

を建設し、発展の基礎を築いた。

19) Hôtel des Monnaies : セヌ川に面した第6区のコンティ河岸11番地にある。時代によって場所がちがっていた貨幣鑄造を定った所で行う事をルイ15世は決定、国が買収した大小二軒の邸宅の跡地のこの場所に建設する事になった。建築コンクールの当選者はジャック・ドニ・アントワヌ、当時35歳の無名の石工だった。彼のプランはガブリエルやスフロの愛用した記念建造物の柱廊をやめ、ルイ16世様式となる最初の建築、質素だが美しい調和をもつ長い正面玄関をセヌ川に臨んで建設した。長さ117米、各階毎に27の窓を持ち、イオニア式の6本の円柱が半円形の5つのアーケードの台座の上に建っていた。1771年4月30日に工事が開始され、1777年に完成した。

20) église Saint-Sévrin : 第5区のプレートル・サン・セヴラン街(長さ79米、最狭幅10米)にある。聖セヴランは誰かの答は2つあり、一人はクロヴィスが病の時に自分のマントで王を包み快癒させたダゴヌ神父、もう一人はクロヴィスの子クロドミールの子クロドアルドを、この子が修道僧になるための教育をしてもらうため、この子の養育係となった隠者セヴラン Sévrin le Solitaire だとする説である。クロヴィスの死後、彼の王国を三分して相続したクロドミール、クロテール、シルドベールは、クロドミールが死去すると、その領土を奪うため、彼の子供たちを殺したが、クロドアルドだけは僧籍に入り、王位の野心を捨てたとみなして殺さなかった。聖セヴランに教育されたクロドアルドは立派な僧となり隠者として一生を終えた。人々は彼の師である聖セヴランの遺徳を偲んで小さな礼拝堂を建立したのが、この教会の起源という(560年頃)。パリがヴァイキングの攻撃にあった時、聖セヴランの遺骨はノートル・ダムに移され、危険の去った950年頃に元の場所に戻された。礼拝堂はサン・ルイの治世の初期か12世紀末に、ゴシック様式で教会に改築され、15世紀にはフランボワイヤン様式に改築された。大革命時代には火薬会社が管理、1803年に教会として復活、1837年に改築され、1913年から1922年にかけて周辺地域が整理され、教会の建物がすっきり見えるようになった。

21) Alexandre Parodi (1901-1979) : パリ生れの政治家。父は有名な哲学者ドミニック・パロディ(1870-1955)である。抵抗運動に参加し、占領下のフランスの臨時政府代表となり(1944.2.)、戦後は労働相(1944-45)、イタリア駐在大使から国際連合の安全委員会のフランス代表(1946-49)を務め、外務省官房長(1949-54)から國務院副院長になった(1960)。

22) Georges Bidault (1899-1983) : 中仏アリエ県ムラン出身の政治家。歴史学教授

としてパリのルイ・ル・グラン高などで教えるかたわら、カトリック左派として機関紙「オーブ」*Aube*を発行、対独融和策に反対した。第2次大戦に参加、捕虜になり、釈放後（1941）たゞちに抵抗運動に参加、抵抗運動全国評議会議長として抵抗運動を指導（1943）、解放後はド・ゴール政府の外相として、ド・ゴールに同行しモスクワで仏ソ条約を締結した。サンフランシスコでの国際連合の創立、ロンドンの外相会議にも参加した。カトリック左派の人民共和党（M.R.P.）のリーダーとして中道左派内閣の首相（1946、1949-50）をはじめ国務相、外相など歴任、ヨーロッパ連合の実現に努力した。1954年、アルジェリアのフランス人擁護に立ち上り、ド・ゴール将軍の政策に猛反対し、1963年に国外に亡命、1968年に帰国した。

23) avenue Denfert-Rochereau：パリ南部の第14区にあり、オプセルヴァトワール大通りとダンフェール・ロシュロー広場を結ぶ、長さ490米、最狭幅31.64米の大通り。13世紀にフィリップ・オーギュストの城壁のジバル門を出てヴァンヴに至る旧ダンフェール街道の一部だった。ベルフォール防衛で奮戦したダンフェール・ロシュロー大佐（1823-1878）の名誉を記念して命名された。92番地にある「マリ・テレーズ病舎」*Infirmierie de Marie-Thérèse*はシャトーブリアン夫人のセレスト・ビュイソン・ド・ラヴィーニュの開設したホスピスで、不幸な運命により晩年を貧乏で苦しんでいる老人を収容した。両親のルイ16世、マリ・アントワネットらと共に大革命中にタンプル塔に幽閉され、奇跡的に一人だけ生き残ったマリ・テレーズ・シャルロット、アングレーム夫人の資金55,000フランでこの建物が購入できたので、彼女の名をつけたのである。経営は苦しく、最後にパリ大司教に売却され、フィユ・ド・シャリテ尼僧院の手で経営される事となる。

同地区にあるダンフェール・ロシュロー広場は、1879年までアンフェール（地獄）広場と呼ばれていたが、アンフェール柵門があり、入市税を徴集する税関があった。またこの門はオルレアンへ行く街道の出発点で、パリにとり極めて重要な門だった。此処に郊外のソーに行く線路の発着駅マリ・ダンフェール駅がつくられた（1846）。このソー線はパリで最初に列車が運行されたパリ・サン・ジェルマン線（1846）より9年後であった。完成祝賀式は、1846年6月23日でヌムール公、モンパンシエ公らが出席している。線路は後に順延され、1895年にリュクサンブール近くに始発駅が新設されたため、パリ・ダンフェール駅は取り壊されて、姿を消した。

24) 当時のロシアの外相モロトフ（1890-1986）の名をつけた火焰塚をさす。

25) rue La Fayette：第9区と第10区にまたがる長さ2,830米、幅約20米の通りで、

ジョッセ・ダントン街とオスマン大通りを結んでいる。1823年に開通し、新国王の名シャルル10世街と命名された。しかし1830年の7月革命の立役者の一人ラ・ファイエット侯爵(1757-1834)の名がつけられた。1849年、59年、62年と延長工事がなされ、現在の形になった。

26) Philippe Marie de Hauteclocque, 通称 Leclerc (1902-1947) : 北仏ソンム県ベロワ・サン・レオナル出身の軍人。第2次大戦中に2度捕虜になったが、2度とも脱走に成功(1940.5.-6.)。ロンドンでド・ゴールと合流、カメルーン総督となり自由フランスと連合した(1940)。フランス領赤道アフリカ(A.E.F.)軍司令官として自由フランス軍と出撃シクフラを占領(1941.3.)、更にモントゴメリーの英軍に合流するためチャドを出発(1942.12)、トリポリで合流した(1943.2.2.)。チュニジアでの作戦に従事した後、1944年6月のノルマンディー上陸作戦に参加、第2機甲師団と共にパリに一番乗りし、フォン・コルティツから降伏文書を受け取った。1944年11月23日、ストラスブールを解放する。インドシナ派遣最高司令官として(1945)、フランスを代表し日本の降伏を受けとった。北アフリカ査察中に飛行機事故で急逝した(1947.11.28.)。享年45歳。死後に元帥位を遺贈された。

27) Robert Lacoste (1898-1989) : 南仏ドルドーニュ県アゼラの出身。フランス社会党の代議士で、経済と労働組合の専門家として、第4共和政の間に多くの閣僚ポストを歴任した。1956年2月から58年4月15日まで、アルジェリア専任相として、その独立運動に反対して戦かい、統合政策支持の立場を貫いた。

28) avenue de Victor-Hugo : 第16区にあり、シャルル・ド・ゴール広場とアンリ・マルタン大通りとラ・フェザンドリ街を結ぶ、長さ1,765米、幅23米から36米の通り。1825年のパッシーの原野の宅地分譲の時、村道と合体し、1830年まではシャルル10世通り、1864年まではサン・クルー通り、1881年まではエイロー通りと命名されていたが、ユゴーの死(1885.5.22.)にあたり、残り全部がヴィクトール・ユゴー大通りになった。エイローの名は、同じ16区のトロカデロ広場からメキシコ広場を結ぶ道(長さ300米、幅16米から36米)に新しく命名された。

29) hôtel Meurice : パリの第1区から第4区にまたがるリヴォリ街(長さ3,070米、幅20,75米から22米)の228番地にある4つ星の豪華ホテル。第1帝政末期にあったワグラス・ホテルの跡地に、1830年頃に建設された。ルイ・ナポレオンの愛人だったイギリス人ハワード嬢ことエリザベス・ハリエットがこのホテルに滞在している。ホテルはベ

ル・エボック時代の豪華な内装で、室内の備品は完璧である。現在の客室数は全部で224室、シングル、ダブル、サロン、バー、グリルがある。コンコルド広場、ヴェンドーム広場に近く、チュイルリ公園は目の前で、絶好のロケーションを占めている。ドイツ軍は此処に司令部を設置した。

30) Marie Pierre Koenig (1898-1970) : ノルマンディー地方のカルドヴァス県の県都カーン出身の軍人。1917年に志願して第1次大戦に参加、戦後に西部フランスのドー-セーヴル県のサン-メクサン歩兵学校に入学した。1939年大尉としてノルウェー派遣軍に従軍、ノルウェーでの戦闘後にイギリスに渡り、ド・ゴール將軍の麾下に参加(1940)、自由フランス軍を指揮し、アフリカ戦線のビル・ハケイムで、イタリア、ドイツ両軍と交戦した。1944年にフランス国内軍事司令官、パリ解放後にパリ軍事総督(1944.8.)、続いてフランスのドイツ軍占領地帯解放のため戦った(1945-49)。戦争最高会議副議長(1950)。フランス社会党代議士として(1951, 1956)、国防相を務めた(1954-55)。ド・ゴールが政権を取ってから政界を引退した。

31) Alphonse Juin (1888-1967) : アルジェリア第2の港湾都市アナバ(旧ボーン)の出身の軍人。父は憲兵だった。奨学金を得てサン-シール士官学校に入学(1911)、首席で卒業し、モロッコで勤務(1912-14)、第1次大戦ではシャンパーニュ戦線で重傷を負い(1915.3.)、モロッコに帰還し、リヨテ將軍の参謀となった。モロッコのリフ族叛乱の鎮圧に武勳をたて、リヨテと共にフランスに帰国したが、1929年から33年までモロッコで軍務に服し、1935年ズワーフ第3連隊長、1938年に旅団長に昇進した。第2次大戦中は第15機械化師団を率い、第1軍団のダンケルク撤退の殿軍を務めたが、リールでドイツ軍に包囲され捕虜になった(1940.5.30)。しかしベタン將軍の要請により釈放され(1941.6.)、ウェイガン將軍に呼ばれ北アフリカ軍司令官になった(1941.11)。連合軍の上陸の際、数日間抗戦したのちに和解(1942.12.)、その方針に従ってチュニジアのドイツ・イタリア軍と戦った。イタリア征服軍司令官となり(1943.11.)、カリグリアノ会戦に勝利し、ローマ進軍への路を開いた。国防軍参謀総長(1944)、次にモロッコ総督となり(1947-51)、フランスとモロッコの友好関係を固める努力をしたが、彼らの独立への欲求を遂に理解できなかった。フランス軍総監(1951-53)の後、アイゼンハウアー將軍の下で中央ヨーロッパ地上軍総司令官(1951-56)に任命され、1953年には元帥に任じられた。生れ故郷の北アフリカへの愛着から、アルジェリアのフランス人の抵抗を支持、ド・ゴール將軍と対立したため、1962年に退役を強制された。『回想録』*Mémoires*



(1959-60)を残している。アカデミー・フランセーズの会員でもあった(1952年以後)。

32) Georges Thierry d'Argenlieu (1889-1964) : ブルターニュ半島先端のフィニステール県の軍港ブレスト出身の提督。1920年にカルメル会に入団, 1940年にロンドンでド・ゴール將軍の麾下に入り, 1941年に太平洋方面高等弁務官に任命され, 自由フランス海軍司令官として活躍, 1945年にインドシナ高等弁務官となったが, 後に引退し, 修道生活に入った。

33) *le Magnificat* : カトリックで晩課に歌われる聖母マリアの賛歌で, 勝利の賛歌でもある。

34) Mont Valérien : パリ西方, セヌ川左岸にある丘で, 高さは161米。ガリア時代から信仰の中心地で, 15世紀には多くの隠者が住んだ。1830年に要塞が建設され, プロシャ軍のバリ包囲の時はバリ防衛の重要な役を果たした(1871)。1941年から44年にかけて刑務所に転用され, ドイツ軍により4,500人以上のフランス人が銃殺された。1960年に記念の追悼碑が建てられた。

35) René Coty (1882-1962) : 英仏海峡に臨むセヌ・マリタイム県の港町ル・アーヴル出身の政治家。弁護士から政界に入り共和派左派の代議士, 次に上院議員となったが(1935-40), フランス敗戦と共に一時政界から引退した。解放後に政界に復帰, 都市計画・復興相に就任(1947-48), 参議院議員, 同副議長を経て, オリオールの後任として第4共和政の大統領に選出された(1953.12.23.)。1958年5月13日のアルジェリア危機の後, 事態解決のためド・ゴールに政界復帰を要請(1958.5.29.), ド・ゴールの出馬と共に大統領権限を譲って, 政界から引退した。インドシナ戦争の終結は彼の功績といえよう。

36) Marcel Carné (1903-1996) : パリ生れの映画監督。ジャック・フェデヤルネ・クレールの助監督を務めてから, ジャック・プレバールとシナリオを共作(1936-45), 「ジェニーの家」*Jenny* (1936)を第一作としてデビュー, 一躍フランス映画界の中堅となった。庶民生活の素朴な描写を主張した民衆主義 *populisme* が, 彼の作品の中では心を捕えてはなさない詩情で画面に表現されている。また主人公たちは, 幸福を探し求めるが, 悪意のある社会の秩序から発生した抗し難い宿命に泣く, 労働者階級出身の庶民である。主要作品は上記の他に, 「霧の波止場」*Quai des Brumes* (1938), 「北ホテル」*Hôtel du Nord* (1938), 「悪魔は夜来たる」*Les Visiteurs du soir* (1942), 「天井桟敷の人々」*Les Enfants du Paradis* (1944), 「嘆きのテレーズ」*Thérèse Raquin* (1953) など。

37) Alain Resnais (1922- ) : ブルターニュ半島のモルビアン県の県都ヴァンヌ出

身の映画監督。1948年から短篇映画を製作し、稀有な美的センスで注目された。「ヴァン・ゴッホ」*Van Gogh* (1948)、「ゲルニカ」*Guernica* (1950)などを世に送り、次に発表した「夜と霧」*Nuit et Brouillard* (1956)で、ナチの強制収容所の忘れ得ぬ映像で大きな衝撃を与えた。アウシュヴィッツを題材としたこの作品は、内省的心理的ドキュメンタリーとしての新境地を開拓している。日本との合作映画「二十四時間の情事」*Hiroshima mon amour* (1959)から劇映画も製作するようになるが、そのハードな形式は映画のレトリックを改新し、1960年代の新進映画監督の中でも最も独創的監督として評価されている。主要作品は前記の他に「去年マリエンバードで」*L'année dernière à Marienbad* (1961)、「ミュリエル」*Muriel ou temps d'un retour* (1963)、「戦争は終わった」*La guerre est fini* (1965)、「バラのスタヴィスキー」*Stavisky* (1974)、「プロヴィデンス」*Providence* (1977)、「アメリカの伯父さん」*Mon oncle d'Amérique* (1979)など、愛、時間、現代の良心を苦悶させる諸問題をテーマに創作を続行している。

38) rue des Saints-Pères：第6区と第7区にまたがり、マラケ河岸、ヴォルテール河岸をセーヴル街に結ぶ、長さ765米、幅10米から20米の通り。この道は1531年にはCimetière-aux-Maladesという小道にすぎず、1535年になって現在の49番地の高台にあったSaint Pierreに捧げられた礼拝堂に因んでSaint Pierre街と呼ばれていたのが訛ってSaint-Père、次に複数形のSaints-Pèresになったという(1652年頃)。この路はグルネル街で終わっていたが、1866年にセーヴル街まで延長され、現在の姿になった。

パリ大学医学部の新校舎は、39番地から45番地の土地にあったラ・シャリテ病院の跡地に建設された。1937年から工事が始まり、1953年に完成、57年から業務が開始された。建築家はデバ・ボンソン他である。2階分だけ高さを低くしたが、サン・ジェルマン・デブレ地区とパリの空の景観を台なしにしている。

39) André Malraux (1901-1976)：パリ生れの小説家。美術批評家。祖父も父も自殺したと伝えられていて、この家族は不明な点が多い。東洋語学校に入学したという事も疑問視されている。23歳の時に考古学研究のためインドシナに行き、多くの仏像を発見、その東洋的冥想の雰囲気魅了される。クメール文化調査のこの旅行中に、現地の革命派と知り合い援助をしたという。次に中国に渡り、国民党に参加、広東革命で活躍したが、蒋介石が共産党と絶縁したのを機に中国を去った(1926)。『西欧の誘惑』*La Tentation de l'Occident* (1926)は、中国を旅している西欧の青年と、欧州を旅している中国の青年との往復書簡体のエッセーで、西欧的知性の限界を問題にしたニヒリズムの色が濃い作品

である。更に広東革命を扱った『征服者』*Les Conquérants* (1928), インドシナ探険をテーマにした『王道』*La Voie royale* (1930), 上海革命に取材した『人間の条件』*La Condition humaine* (1933) を発表, ゴンクール賞を受賞した。政治活動は 30 年代の頃から勃興してきたファシズムへの戦いから始まる。反ファシスト委員会のメンバーとして働き, アラゴンらとモスクワの第 1 回全ソ作家大会に出席し, 共産主義者との連帯を強めた。スペイン内乱に際しては, 国際義勇軍に参加, フランコのファシスト軍と戦い, この間の体験を『希望』*L'Espoir* として発表した (1937)。国籍もちがい, 主義もちがう若者たちが一致団結してフランコのファシズムと戦う姿は感動的である。第 2 次大戦に志願兵として参戦, 負傷して捕虜になるが脱走, 抵抗派に参加, この期間にド・ゴール將軍と知り合い, 解放後, ド・ゴールの臨時政府に情報・宣伝相として入閣する (1945-46)。第 4 共和政が成立, ド・ゴールの政界引退と同時に彼も引退するが, ド・ゴールの再出馬と第 5 共和政樹立と共にド・ゴール内閣の文化担当國務相として入閣 (1958-69), 汚れていたパリの記念建造物の徹底的な洗浄作業を実施, それらの建物の建造当時の美しい姿に復活させた。政界から引退後は多くの芸術論, 美術評論を発表した。代表作は『芸術の心理』*Psychologie de l'art* (1947-49, 3 巻), 『沈黙の声』*La Voix du silence* (1951), 『世界彫刻の空想美術館』*Le Musée imaginaire de la sculpture mondiale* (1952-54, 4 巻) などがある。

40) rue de Grenelle : 第 6 区と第 7 区にまたがり, ドラゴン街とド・ラ・ブールドネ街を結ぶ, 長さ 2,250 米, 幅 10 米から 12 米の通り。14 世紀にはアンヴァリッド橋とパッシー橋の間にあったセヌ川の湾曲部の湿地帯を行く小道だった。この湿地帯はサン・ジェルマン・デ・プレ修道院により干拓され, 農地にされたため, この土地の大部分は修道院の所有地になった。18 世紀末まではこの状態のまま, 道は, 「雌牛道」*chemin aux Vaches* とか「裁きの道」*chemin de la Justice* と呼ばれるようになった。これはサン・クロチルド教会の現在地 (第 7 区のブーガンヴィル街) に最初の頃あったサン・ジェルマン僧院の絞首台のある処刑場に通じていたからである。一時, この道はガラネル *Garanelle* 通りと呼ばれた時があったが, それは「部外者禁猟区」*garenne* に通じていたからである。現在の名になったのは 1868 年である。73 番地は, 昔, サン・シュルピス教区の墓地で「聖十字架」墓地と呼ばれていたが, 1701 年に整地され売却され, 宅地となり, 豪邸が建築され, 一時, フランス外務省が入っていた。

41) パリシイ族の貨幣：パリの名の起源になったゴール人の一部族パリシイ族は紀元

前2世紀頃から見事な金貨をはじめとする貨幣を鑄造し始めていた事が、発掘などの考古学の調査で判明した。現存している金貨スタテルは重さ約7.5グラムで、表面にも裏面にも見事な模様でケルトの神が図案化されている。

— 完 —

(追 記)

- 1) 参考図書などは, [ I ] の巻末に掲載してありますので, そちらを御参照下さい。
- 2) 前稿 [ XXXII ] に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。  
p. 7. 下から 4 行目 ズデーデン  
p. 26. 上から 10 行目 Paquebot  
p. 29. 上から 9 行目 文学そのものの  
p. 33. 上から 12 行目 ルイ・ル・グラン

—2009.7.12—

あとがきと謝辞

1998年4月に第1部を刊行し、2010年12月の第33部の本篇をもって、『パリ——誕生から現代まで——』は完了します。続篇の第34部は、全篇の訳注の索引です。いろいろ誤りもあると思いますが、なにかの御参考までに御利用いただければ幸甚です。

ながい間おつきあいたゞき、ありがとうございました。

2010年11月25日